アナザーワールド

百目鬼翠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナザーワールド

【Nコード】

N7037T

【作者名】

百目鬼翠

【あらすじ】

生物には必ず一度だけの生と死が訪れる。これは決して避けられないものではない。

だが、RPGの世界では？

生も死も何回も繰り返すことができる。同じ瞬間を何回も繰り返すことができる。

キャラを何回も作り直すことができるが、そのキャラを各プレイヤー自身とし、別空間に存在する世界で自身が動いてみてはどうだろうか？

当然プレイ中は痛みを伴うし、プレイヤーは一人しかいないため一度ゲームオーバーになれば復活は出来ない。

別空間とはいえプレイヤー自身、つまり生身の人間。

当然、ゲームオーバー＝死。

現実世界とは違う別空間に存在する、RPGの世界。
アナザーワールド。

ゲーム開始

眩しい太陽の光がカーテンの隙間から射し込んでいる。

「ふあゝ。まだ眠いし、だるいなあ…。」

固まった体をほぐすように体をひねりながら、時計を見る。

「…やべえ…。遅刻する…。」

時計は8:20を指していた。

一瞬のうちにベッドから飛び出し、とても速い動きで制服へと着替え、登校準備を済ませ、顔を洗い、家を出た。

現在8:23。

どうにか間に合うか…。

時は進み放課。

「おい、英二、起きろ。」

「…あ？もうこんな時間か…。」

時計に目をやればすでに4時50分。

「ったく、いつもギリギリに来て、ずっと寝たまま1日過ごして…。」

夜は何やってんだ？…あ、女か。」

「ちげえよ。ゲームだよ。」

「あ、ゲームで思い出した。今日実体験できるRPG出るらしいな。英二は買うのか？」

「…ああ、買う。」

「なら、感想よろしくな。」

「は？自分でやらなきゃわかんねえだろ？だから、自分で買って、

やれ。」

「ちえっ…。まあいいか。」

「そいじゃ、俺は用事あるから、じゃあな。」

英二は学校を出て、自転車で5分程度にあるゲーム専門店に向かった。

(実体験できるRPGか…。一体どんなのだろうか…。)

ゲーム専門店に近づいてきた。(すごい人多いな…。この人らもあのRPG目当てかな…。)

英二は店内に入り、店頭には友人である裕司が言っていたゲームが陳列されていた。

残り5、6個だ。

英二は購入し、家路をたどる。

帰宅した英二は、先ほど買ったゲームを起動しようとしたが…

「PS3なのか、PS2なのか、PCなのか、わかんねえな…。」

取扱説明書を一応読もうとしたが…

・このゲームはDVD読み取り機能があれば、どのハードウェアでもプレイ可能です。

・実体験できるゲームですので、ゲーム内での感触は現実と同じものです。

・このゲームは一度起動すると、そのハードウェア以外での起動は不可能となります。

・ゲーム中は、ゲーム内で過ごすことになり、ゲーム内の一年が現実世界での1分となります。

取扱説明書にはこのような内容しか書かれていなかった。

「まあ、細かい事は実際にやってみろってことか……。」
PCを起動。ディスクをPCのディスクドライブにセットした。画面に背景が黒でゲーム開始の字が白で出た。
3分ほどたつと、ゲーム開始の字がとても眩い光を放ち、段々意識が遠退いていく……。

始まり

何も無い真っ白な空間。

体は宙に浮いている感覚。

「ここは、どこだ…？」

(ここに来る前には、確かPCで…。)

いろいろなことを考えていると、いきなり…

「ようこそ。アナザーワールドへ。」

周りを見渡したが何も無い…。

「まずは、キャラクター名を頭に思い浮かべる。又は、口に出してしゃべってください。」

「綾野 英二。」

「では、綾野 英二さん。アナザーワールドの世界へとご案内いたします。」

「ちよっ…案内って、まずここはどこな…。」
また、意識が遠退いていく。

肌に心地よい風を感じる…。寒くもなく、暑くもなく、ちょうどいいそよ風を…。

「…ん？ここはどこなんだ？」草原にある道のど真ん中にいた。

「もじゃ…ここがゲームの世界。アナザーワールドなのか？」

辺りを見回すと少し離れた場所に西洋の城らしきものや、煙の上が

る山、雲にまで届いている山。

そして、足下には、小さな本、短めの剣、籠手のようなものに携帯電話みたいなのが付いたもの、3枚の銀貨があった。まずは、小さな本を拾い内容を確認。

・ 籠手に付いた携帯電話のようなものは、冒険を補助するアイテムです。通称：SMP

SMPに関する説明が大部分で、あとはゲームの注意事項が3つ。

- ・ このゲームは5つキーアイテムを集める事によりクリア。
- ・ クリアすることにより初めてゲームから抜け出すことが出来る。
- ・ ゲーム内では、ゲームマスターが違法と見なさなければどのような事してもかまわない。

「…これって、ひでえな…。ほぼ無法地帯じゃんかよ…。」
ゲームマスターがどこまで無罪とするのだろうか…。

(ここにいちや、何も進まないな…。)
足下にあるものを全て拾い、剣と銀貨はSMPに収納。
籠手は装着。

とりあえずあの城に向かった。

ゲームスタート

城に近付いて分かったことは、高さ約10m、横2km以上の城壁に囲まれていることだ。

門は開け放たれていて、門の左右に兵士らしき人が2人ずつ立っていた。

門を通過するとき、兵士に話しかけられた。

「その者、歩みを止めよ。…旅の者か？」

（今は旅の者でいいのか…？まあ、いいか。）

「…はい、そうです。」

「では、念の為に持ち物を…。ん？その籠手は…。はっ…失礼致しました。プレイヤー様。どうぞお通りください。」

（ゲームの中だし、この反応は当たり前か…？にしても、プレイヤー様か…。）

兵士は籠手を見た途端に、態度を変えた。

門を通過すると、すごい人の数…。幅5mはあるであろう道の両脇には露天があるようで、その間は人だけ埋め尽くされているようだ…。

（まずは、店に行って少しでも装備整えなきゃなあ…。）

とりあえず、適当に歩いて店を搜索することにした。

人混みをかき分けながら進むこと30分、人が少ない所に出た。その場所の中央には立派な噴水があり、その後方には、城が確認でき

た。

英二は噴水のふちに座った。

(滅多に運動しないから、疲れたなあ…。)

休憩中、道行く人を観察していると、半分くらいの人が自分と同じ籠手を着けている。

残り半分は一人一人違う顔、違う服を着ていた。ゲーム内のキャラとはいえ、なかなか手の込んでいるようだ。

そろそろ休憩を止め、また商店を探そうかと思った頃、今さっき通ってきた道を左に曲がった通りから女性の叫び声がした。叫び声のした通りは、あまり人通りが少なかった。

英二は急いでその方向へと走った。

約1分で着いたが、大きな通りから脇の小道に入ったところに、叫んだと思われる女性とその女性を挟むように立っている2人組の男がいた。

「やめてください。あなた達と遊んでる暇なんてありません。」

「お嬢ちゃん、別にいいじゃんかよ。俺たちとちよつとだけお茶しに行こうぜ? ……おい、てめえ、なんだ? お嬢ちゃんの知り合いか? まあ、邪魔だから、とつと失せる。」

2人のうち1人が英二に気が付いたようだった。

「その人が、嫌がつてんだからお前からこそ失せるよ。」

「ああ? てめえ誰に口聞いてんだ?」

「お前らだよ。失せる。」

「てめえ…調子に乗りやがって。やってやる。」

2対1明らかに不利。

だが、1人はなかなか動こうとしない…。
相手が拳を振り上げた瞬間、声がした。

「おい、その者たち。何をしている。我らは、アウグスタ警備隊である。もしや喧嘩ではなかるうな？」

警備隊の隊長らしき人が言葉を発し終える前に2人組は、逃げ出した。

「むっ…。あの2人組を追え。」

隊長らしき人は命令を下した後、俺らに近付いてきた。そして…

「私はアウグスタ城、城下警備隊、隊長のランブルだ。君ら、何をしていたのだ？」

「あの、こちらの人は悪くないんです。私がさっきの人達に、からまれていたところに、こちらの人が助けに来てくれたんです。」

「ほお…。まあ、この辺りは中央通りに比べて治安が悪いからな。以後気をつけたまえ。」

そう言い残すと隊長は去っていった。

「さっきは大丈夫だったか？怪我とかしてない？…あ、俺、綾野英二。よろしくな。」

「えっと、私は時又 玲奈。先ほどは助けていただき、ありがとうございます。腕を掴まれたりした程度なので、大丈夫ですよ。心配してくれて、ありがとうございます。」

（俺的には、女性に頭は下げたくないしな…。）

「そんな頭下げなくても…。たまたま通りかかっただけで、最終的には警備隊の方達が追っ払っちゃったし。」

「いえいえ、本当にありがとうございました。」

「…あの…。」

「はい？何ですか？」

「もし良かったら、一緒に行動しないか？またさつきみたいなおことあつたら大変だし…。」

「厚意はありがたいのですが、私じゃ足手まといになっちゃうかもしれませんよ？」

「いやいや、一人で攻略頑張るより、2人とかの方が楽しいじゃない？だからさ…、一緒に旅してください。お願いします。」

「…こちらこそよろしくお願いします。綾野さん。」

「ありがとうございます。よろしくお願いします。…あ、さんは付けなくてもいいから。何かあつた時にさんを付けてられる時間無いだろうし…。」

「…じゃあ、英二で良いですか？」

「じゃあ、玲奈って呼ばせてもらおうよ？」

「…はい。あの…たまたま通りかかったただけってこっちに何をしに？」

「え？…ああ、防具屋とか探しててさ。」

「それだと、噴水の向こう側ですよ。」

「そうだったんだ。まだ始めたばかりだったから…。」

「え？でも開始時に足下に黒い表紙の本ありませんでした？」

「…紙切れ、籠手、銀貨3枚、小さい剣、しか無かつたけど…。」

「…つてことはスタート時の支給品は全員違うのかな…？私の場合、黒い表紙の本、籠手、金貨10枚、指揮棒のような木の棒、でした。」

「へえ、黒い表紙の本つてのが詳しい説明書みたいなものなのか？」

「はい。籠手についているSMPの細かな使い方や、この世界に関すること、などたくさん書いてありました。」

「ちよつとそれ読ませてくれないかな？」

「読み終わると、消滅しました…。」

「じゃあ、大まかな事教えてくれない？」
「えつと……」

内容は以下の通りである。

- ・ゲーム内での通貨は、金貨1枚⇨銀貨100枚、銀貨1枚⇨銅貨100枚。
 - ちなみに、銅貨1枚⇨リンゴ1個程度。
 - ・プレイヤーのレベル上限は無い。
- また、モンスターのレベル上限も無い。

・モンスターは街や城内では特殊な場合を除き出現しない。

・モンスターは、初めからは存在せず、ゲームマスターからの開始の合図により出現する。

・SMPには、地図（現在地も分かる）、アイテムや金の無制限保存、クエストやパーティーメンバーの情報、などといった、RPGには必須の機能がある。

・24時間中1回食事をしなければならぬ。ただし、食べるものはおにぎり1個といった物だけでもよい。

・48時間中8時間は睡眠を取らなければならぬ。
これらの条件を満たさなければ、ゲームオーバーになる。

などが書かれていたようだ。

「なるほど。これだけの基本情報があったのか……。初めから差が

開きそうだな。知らないと確実にゲームオーバーになってたかも知れないいな…。」

「私は最初からあったから、みんな知ってるのかと思ってた…。」
「現に無かった人が目の前に。…まあ、まだ本当の開始じゃないって事だし、いろいろ準備しなきゃな。」

「…例えば？」

「ん？まずは初歩の各装備とか回復薬、解毒剤。後は念のために食事を。解毒剤まではどのRPGでも基本だしな。」

「へえ…そうなんだ。私はあんまりゲームとかしないからなあ…。」

「まあ、本当の開始までにさっさと準備しなきゃ。」

英二と玲奈は防具屋、武器屋、道具屋の順にまわった。

防具屋では…

英二

レーザーアーマー

レーザーシューズ

レーザーベルト

鉄の帽子

ポケットが片足5個ついているズボン

計 銀貨1枚分

玲奈

ミスリルアーマー

ミスリルブーツ

ミスリルキャップ

ミスリルスカート

魔力付加のある腕輪（体に衝撃が加わるとその部分の空気が一時的に固まり衝撃を和らげるらしい）

計 金貨4枚

腕輪がどうやら高かったようで、銀貨250枚らしい。

武器屋では…

英二

ダガー10本

クリスタルソード

計 銅貨150枚

玲奈

上級指揮棒

召喚魔術書

計 金貨1枚

召喚魔術書は過去に召喚したことのある物やなんでも召喚できる。

道具屋では…

英二

回復薬3個

解毒薬2個

携帯食料1個(コンビニ弁当のようなもの)

計 銅貨30枚

玲奈

上級使い魔召喚書

下級ドラゴン召喚書

ミニペット召喚書

ミニペット用餌

計 銀貨480枚

各召還書は、ランダムに出現する。

ドラゴンと使い魔は別物として扱う。

上級はセミボスランク以上各神々以下。例)ゴレム、サイクロプスなど。

中級は上級、下級以外。例)ヴァンパイア、リザードマン。

下級はペットとして飼われる場合もあるようなランク。例)スライ

ム、オークなど。

とても少ないが、神級が存在する。例)ベルゼバブ、バフォメット、キメイラ、など神話に存在するような生物が分類される。

道具屋を出て…

「…ねえ、今すぐ召還書使ってみても良いかな?どんなのが出てくるか気になるし。」

「さすがに、通りでやるのはどうかと思うから、あっちの公園とかに行かないか?」

「うん、わかった。」

…5分後。

「よし、この辺りで良いかな…。」

「じゃあ…、ミニペットから使おうっと。えっと、道具屋のおじさんの言ってたやり方は…指揮棒を持って…召還書に指揮棒の先を向けて…」出でよ!』と唱えるか。出てきたら契約の話で了承をもらうっと。…よし。』出でよ!』」

『…僕を呼んだのは、お主かミヤ?』

「はい、私です。」

(わあ、三毛猫だあ。可愛い。しかも語尾がミヤって…。)

『では、僕と契約を結ぶかミヤ?契約条件は僕をペットとするミヤ!』

「はい、契約を結びます。」

『お主、名をなんと申すかミヤ?』

「時又 玲奈です。」

『ほう…。僕はケットという精霊だミヤ。人に見えるようにするための媒介がこの姿だミヤ。』

「契約条件なんですけど、ペットっていうことは動物を飼うような

扱いでいいのかな…？」

『それで、大丈夫だミヤ。要は、いつも側に連れていてるって事が条件だミヤ。』

「わかりました。よろしくね？みーちゃん。」

『みーちゃん。か…悪くないミヤ。』

「よし、次は上級使い魔召還書使おうかな…。。……………」『出でよ！』

『…我を呼ぶものはそなたか？我が名はリツチ。死神だ。』

「はい、私が呼びました。」

『契約を欲するのか？』

「はい、契約をお願いします。」

『なら、右手を上になるように胸の前で手を重ねる。そして目を閉じよ。……………よし、では試験をするからそのままにしている。』

(ん…空気が重くなった気がする…。)

『……………ふうん…。よし、契約終了だ。』

「ありがとうございます。ところで何をしたのですか？」

『簡単なこと、心臓に軽く攻撃をし、耐えられるか試したのみだ。最悪の場合でもしばらく痛みが残るだけだ。』

「…な…。まあ、契約ありがとうございました。」

『我を呼びたくば、声に出さずとも我の名を呼ぶまたは、召還魔術書を使うがよい。…さらばだ。』

「最後は、下級ドラゴン召還書かあ…、どんなドラゴンが出るんだろうなあ。…』『出でよー！』

『我を呼ぶのは汝か？』

「はい、私です。契約をお願いしたいのですが…。」

『まあ、そう慌てるでない。人の子よ。我は神龍、ヴァルハイド。

…の子だ。契約内容は、特に無しでよい。…契約はもう終わった。

我を呼ぶときは、ヴァルと呼べばよい。』

「はい、わかりました。」

『では…。』

「はあ…ようやくおわったあ…。」

「玲奈、最後の龍、かつこいいなあ…。めっちゃ強そうだし。」

「まあ強そうなのは良いけど、空気が重くなるのがねえ…。」

「…よし、近くのレストランに行こうぜ。お腹すいたし。」

「そうだミヤ。お腹すいたミヤ。僕は、魚介パスタがいいミヤ。」

この時、英二と玲奈は所詮は猫かと思っただのはいうまでもない…。

英二と玲奈と一匹は近場のレストランへと向かった。

すれ違う人は、玲奈の頭の上に乗っているみーちゃんが人の言葉を話していることに対して、必ずといっていいほど振り返っていた。

レストランに着き、食事を取り、店を出ようとしたところに、突然低い声が頭の中に響いてきた…

『プレイヤーの皆様、準備は整いましたでしょうか？整っていない方もいらっしやるようですが、“本当”のゲーム開始とさせていただけます。』

第一章 イベント

』さてさて、今から大きっぱにこの世界についてご説明いたしまし
よう…。

…まず、この世界にはコンテンツはありません。

またプレイヤー間の問題にはまったく干渉しません。

すべてのことに関し、上限はございません。

…それでは、アナザーワールドの世界をお楽しみください。』

「ついに始まったな…。」

「うん…。」

ドーン!!

外から大きな爆発音。

キヤアー!!

爆発音から数秒後人の叫び声。

外ではゲーム開始後ただならぬ雰囲気にも包まれていた。

「開始後すぐに何かのイベントか?…まあ、ゲームだしイベントに
参加するしかないな。」

英二と玲奈は会計をすまし、店を出た……が、店には窓が無かった
ため分からなかったが、店に入るまではところどころ雲があり、青
かった空が一変、ところどころに赤い雲のようなものがある、暗黒
の空へと変わり果てていた。

「ゲームらしくなってきたなあ…。」

「こんな雰囲気なのに、よく楽しそうにできるね…。」
「まあ、そんなこと言うなって…。それより…あっちの方がすごく黒くて、空が渦巻いてないか？」

そう言いながら指差す先には、城があった。

その城の上空には黒い雲が、雷を時折見せ、渦巻いていた。

「あっちに行ってみるか？」

「私は怖いから…。やめ「よし、行くぞお」！」

玲奈の言葉は英二に遮られ、怖いにも関わらず行くことになった玲奈。

それに比べ、英二の目は新しいおもちゃを手にした、幼い子どものような、輝きを放っていた。

城に近付くにつれ、叫びながら逃げる人が増えていった。

英二と玲奈が逃げる人だかりから抜けた時、城の中から黒く丸い球体が上空へと消えていった。

人だかりから抜け、すぐに城の門へと着いた。
門には見張りの兵が一人しか居なかった。
その兵士に

「あつ…君達、今は城に近寄らない方が良い…。」

他の兵士が来て

「伝令、全近衛兵は至急会議室に集まるとのこと。」

二人の兵士は門を完全に閉め、足早に去っていった。

「あの兵士、なんかヤバそうな雰囲気だったなあ…。」

「何があつたんだろ？」

「さあ？わかんねえや。…あつ、空が元に戻ってきたな。」

「あつ、本当だ。」

空の暗闇は城の上空の渦に吸い込まれるように消えていつていた。

「あつ、英二。あれ…。」

「ん？ああ…さっきの爆発音のやつじゃねえか？」

空が晴れ光が射すことでわかったが、城の一部に大きな穴があいていた。

その穴は大砲でもあけることができないほどの大きさだ。

「…普通のモンスターとかが出来る仕様じゃないな…。…多分す

ごい上の…ラスボスかも…？」

「…最初からラスボスって…。」

「たいていのゲームは誰かがさらわれた。とかで始まるから当たり前じゃないか？」

「だとしても…。」

「まあ、イベントなんだし…ここで立ち止まるのもなんだし、街の外に出てレベアゲでもするかな。」

英二と玲奈は、英二が街に入って来た道を戻り、外に出た…が、景色は変わっていた…。

何も無い草原だったはずが、森ができ、至る所に凹凸が出来ていた。

その出っ張っているところは時々動いていることからモンスターと推測される。

「……ここに来る前とは変わったなあ。」

「ん？どういう事？」

「いやあ……森も無かったし……ずっと緑の草原だったし……。」

「へえ……そうだったんだ。」

「……よし、とりあえずあっちの方で狩るか。」

ゲームの世界とは違い、はたまた現実の世界とも違う、至る所に小さなディスプレイのようなものが、全方向に所狭しと並んでいる空間。

その空間の中央に浮いている者がいた。

「……ふふふつ……まずは最初のイベントは起こした。……はたしてこのゲームをクリアして抜け出せる物はあるのかな？……ハッハッハッ……不可能だろうな……。……この世界の終わりには到底かなわない敵が存在するからな。」

それと、最後のキーアイテムは……にあるからな。」

第二章 新機能

英二と玲奈は数多くいるスライムやウルフなど小さなモンスターを狩っていた。

英二は自分から攻撃をしてこない無抵抗なスライムを平気で攻撃していたが、玲奈はそうではなかった。

初めて自分の手でモンスターに攻撃する。

しかも自分から攻撃してこない無防備な相手に対して。

だが、英二が攻撃しているのをしばらく眺めていただけだが、しだいに抵抗が無くなってきたらしく玲奈はついに行動を起こした。

「……みーちゃん、攻撃して。」「わかったミヤ。攻撃方法は委任でいいんだミヤ？」

「うん、お願い。」

欠伸をしながら玲奈の頭から跳び降り、玲奈の前に立った。

「……メテオレイン!!!」

みーちゃんが玲奈が聞いたことがない言語をつぶやき、最後に玲奈にもわかる単語を叫び、英二がいる向き以外に手をかざしたとたん、いきなり上空から大小様々な隕石が降ってきた。

雨のように。

ヒュウ~~~~ドゴーン

轟音がしばらく続き、止まった。

「…いかがかミヤ？ 儂が放てる数少ない最上級の火属性の魔法だミヤ。」

「…やり過ぎじゃない？」

「これくらい普通だて思うミヤ。……まあ、敵の強さはすごく低いのに本気を出してしまったミヤ。」

みーちゃんの魔法にただただ驚いていた玲奈。

「…えっ、何これ？ 白い光の粒みたいなのが集まってきた。」

白い光の粒は経験値である。

自動で経験値が追加されるのではなく、この白い光にプレイヤーが触れる事によって経験値を得られる仕組みなのだ。

「気にすることはねーぞ。その白いやつが勝手にプレイヤーに近付いてきてプレイヤーに当たったら消えるみたいだし。んで、その白い光が経験値みたい。」

白い光は玲奈に集まってきた。それも眩いくらいにたくさん。

その光は、みーちゃんが魔法を放った方から来ている。

よほどの広範囲だったのだろう。

光が集まり出して約30秒がたっただろうか…。

白い光は全て玲奈に触れ消えていった。

「…わあ！…LVUPって文字がいきなり目の前に出てきた。」

「…ってことは、LVUPは本人にしかわからないみたいだな。俺からは見えないし。」

今、玲奈は一気に24LVまで上がり、英二も地道に頑張つて23LVまで上がっていた。

……ただ、パーティーを組める事に気がついていない二人。もしパーティーを組んでいたなら、二人共あと10LVは上がっていただろう……。

「突然ですが、ここで新機能を追加させていただきます。

現段階でプレイヤーの最高レベルが50LV以上になりました。

では、新機能についてご説明させていただきます。

今回追加される新機能とは、すでにあるパーティー機能をグレードしたような機能：ギルド機能がございます。

では、ギルド機能についてですが、パーティー機能に比べて経験値獲得共有の値が格段に落ちてしまいます……が、ギルドはパーティーの8名までとは違い最大メンバー数は無限大です。

無限大と言っても、ギルドの最高レベル×0.5までの人数ならギルドに加入させることが出来ます。

パーティー機能の経験値獲得共有と、ギルド機能の経験値獲得共有は併用できます。

また、パーティー機能と同じで、キーアイテムを共有出来ます。

新ギルド作成には50LV以上のプレイヤーであること、ギルド作成用のクエストをクリアすること、以上が条件となります。

さて、新たな機能、ギルド機能についてお分かりいただけただけでしょうか……。

……ギルド機能にはまだまだ機能がございますが、その機能は各プレ

イヤーでお探してください。

では、引き続きアナザーワールドの世界をお楽しみください。』

「ギルド機能が…てか、パーティー機能なんてあったのか…。」

英二と玲奈はこの時、パーティー機能を知り、すぐにパーティーを組んだ。

そして、2人は狩りを再開し、日が暮れて来た頃には街に帰った。

英二 1 3 8

玲奈 1 3 9

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7037t/>

アナザーワールド

2011年10月9日04時26分発行